事情

明治太平記

三編

下

村井靜馬編輯

特32
562

村井靜馬編輯
鮮齋永濯畫

# 明治太平記

全

官許

類國史
屬稗史
冊四十二
函ノ六

東京 壽堂發兌

明治太平記三編卷之二

東京　村井靜馬記

余程ハ會津家ハ既ハ降伏ハ及びたる夫より前ハ二本松家も官軍ハ就く帰降ふ其後ハ五日を過て仙臺南部庄内以下自餘の諸藩も悉く降伏ハ及びて城并びハ兵器の類ひ悉官兵ハ献ぜーゝ奥羽の騒乱平らぐり是より先秋田藩ハ賊軍ハ圍まれ孤立しく志気を変ぜず大義を唱へて近隣の

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

# 明治太平記

東京

壽堂發兌

帝國博物館
類屬 國史 稗史
冊 四十二
函 六
第四號

全



## 明治太平記三編卷之二

東京　村井静馬記

余程より會津家へ既に降伏し及びたる夫より前に二本松家も官軍に就く帰降ふし其後まも五日を過て仙臺南部庄内以下自餘の諸藩も悉く降伏し及び城邑びに兵器の類ひ我官兵に献ぜしゝ奥羽の騒乱平らぐ是より先秋田藩へ賊軍に圍まれあぐゝ孤立しく志気を変ぜず大義を唱へて近隣の

諸藩を教諭せしめ賞し則ち秋田中将に直衣一領名刀一口を賜ふ又言ふ東北へ向ひる官軍の兵士等に寒地に在りて風雪の堪ぐかるん故思し召さるるに毛布一枚づゝ朝廷より賜はる且會津の城退居の後ハ同藩の士卒婦女子等が食糧の備へとても乏しく絲だ何れも飢に及ぶんとせし故鎮将府よりの沙汰として是等が輩二千餘人に各二人口宛の扶助米を給ふ又其国民等を勧めて産業を勤めしむ仍て是等の恩典を被ぶる者に対して誰か天賜の忝なきを歓びざるものなん感涙袖に餘りしぞ偖十月三日に入り天皇東京に臨幸ありて有栖川帥の宮東北の賊徒鎮定せしゝ錦旗節刀を奉還ありしに感斜なるゝ帥の宮の功労を賞し其餘の武官に金を賜ひ群臣に今ゝ奥羽北越に降伏せし諸侯の所置を議せしめらるゝ百官将士の議する処

大同小異なりと雖も其罪大抵均しくれを冗しく厳刑に處せらるべし就中會津に於ては罪の何とも甚しれば死を賜ふも尚餘罪なりと何とも奏しなりしど天皇仁恤を垂させらるも非常寛大の御所置をもて仙臺以下二十餘藩主の死一等を赦しも各藩に幽し其領地三分の一を削りく同姓をして封を襲さしめ會津を又死を宥めらるも父子俱に幽せらるも豎年陸奥斗南の地に三万石を賜ひしも又彼上野の戦争既脱まく奥羽に至りし輪王寺の宮も諸藩帰順に及びしに成を支もなく帰られしを西京に遣はして伏見の宮に幽せらるも其他板倉伊賀の如き脱将の面々も夫々幽閉せしとの人此頃陸奥の国を五國に分ち磐城岩代陸前陸中陸奥と又出羽の國を二國に分ち則ち羽前羽後とせり斯の如くに所置せられく奥羽の地い畧平定せしに又函館に事起れり其故を奈何ふに宜曩に大鳥

大鳥圭介等會津を去て仙臺の海兵と投ず

圭介等徳川を捨て餘の脱兵と倶に總野二州の間に於て屢官軍と接戦せしが遂に戦ひ利あらざして後會津城に来り加へて一方を預りて防禦の策を回らすれども既に勢ひ窮まりて降伏するに至りしこゝに圭介等は這所を去りて稍仙臺まで趣きしに此藩も亦軍威衰へ帰降あさんとする時なれば倶に事を共に図りがたく奈何せんと思ふ折から既に榎本釜次郎等も開陽丸



間天丸蟠龍丸神速丸長鯨丸大江丸鳳凰丸の七艘に乗りて品川海を脱走なし途中に於て風難ありしを左右して乗拔つ漸仙臺の地方に至り奥羽越連合せし賊兵等と謀計を合せ事を挙んと為しに會津その餘の藩々も咸降参に及び又大鳥以下の面々も此地に退き来りしに此に人は奥羽の地にて再挙を謀ること甚だ悔しく尓ば函館を乗り取て彼地を據りて事を為さんと大鳥等甲て

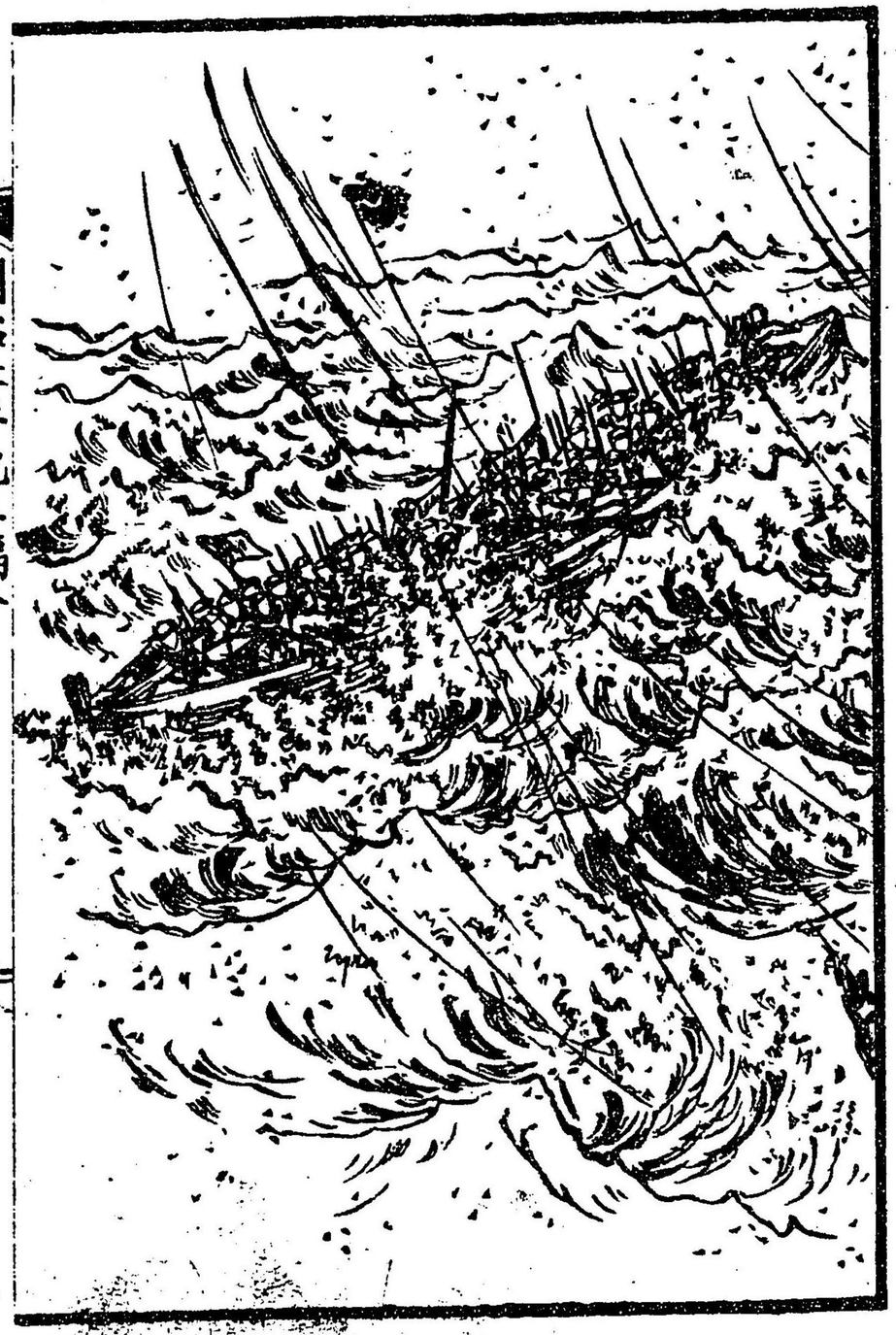
件の船に乗らしめ総勢二千五百餘人此地の港を發帆せり這を是十月九日なり斯く七艘の軍艦は荒波を凌ぎて走らせり此月の十三日に南部領宮古港に入り各船薪を積入れたり所は仙臺より此邊りは石炭の乏しきに薪を以て代へ蒸気の運動を為せるなり偖七艘とも十分に是等の准備整ひしうへ直さに所を出船して同月廿日に南蝦夷なる鷲の木村とに着せり豫て



榎本等船中にて相議して言へらく我輩不意に函館に逼り知府事以下を追退け此地を奪ひ取んとせる事速に運ぶべきれと斯くは名義正しからず固より我々国を脱して此地に身を置くべき所なし仍て此地に止まりて開墾をなすと言ふを主とし知府事に哀訴に及ぶべし然りとて知府事は容易き事もいまだ整ひ亟きに至りなば兵威を示して逼るべしと評議一定為たりしうへ上陸をなんと

程より此日正午の頃まで〻辛〻風荒浪立て
飛雪烈〻く降出せば有り〻て陸より寄付げたを既より使
命を被りたる人見勝太郎本多幸七郎等ハ兵士三十
人を率へ乗の〻哨船より乗り〻風波を凌ぎて上
陸あせば又大鳥圭介等もまた應援を做んとて
兵若干を引俱〻つ続い〻く陸より上りたり此とき知府
事清水谷侍従とて〻るハ函館を少〻離れ亀田
五稜郭とて〻より在り〻て鷲の木村より急使来りて

即今徳川の脱艦七艘此浦より着岸あり〻追々より上
陸〻〻民家より旅宿を求むるとも言ひ或ハまた脱兵
等人数を引俱〻此所へ程なく襲ひ来るなど注進頻り
あり〻〻て清水谷卿驚愕せられ猛可より防戦の
指揮より及ぶより此時既より松前大野小倉福山津軽等
の藩兵此地より在留為たり〻て先大野村とて〻る所と
本陣と定めて夫より諸口へ兵を分署〻今も賊
兵襲ひ来らば討走らせんと構へたり余程より脱兵方



人見本多の
両士等風波
を凌ぎて鷲の
木邑に上陸
せんとす

ある人見本多の両名ハ使節の任に関れば兵隊三十人を引俱して鷲の木邑より函館まぐハ十里に餘る道なる低頻に路次を急ぎしるどもれ十月の末にて晷短うなる頃なれば途中に於て日も昏つ稍初夜過ともに覚した時大野口まぐ至りて此手に對ひて津軽の藩兵敵あり寄せねと思ふるぞ二百余人の兵をもて矢庭に撃てかうしぐ人見等両士を使節の旨と辨解あるんと思へども敵より放つ弾丸の最も烈しく飛来れバたゞ一言の問答に及ぶべき虚間もなく這方も兵士に指揮して俱に砲發に及ぶといへども僅に三十余名をもて二百餘人に當る事故必死となりて働けども之を支ゆると憾なぐ甚ざ危く見へたる折しも應援の進みたる大鳥圭介等の一手の軍兵少し後れて来たりて此砲声を聞くよりも偖ハ人見等ガ一行ハ函館まで至らざるに既に途中に敵なりて接戦

覚へたり固より僅ちの小勢を戦ひ危ふるべき筈
救はぜんべいるゝと総軍残らず走至りて勝誇り
たる津軽勢の横合より撃て掛まべきと気筈
得し人見本多も又我が兵を盛返しく手痛く敵
に當るゝぞ津軽の兵士は賊軍を小勢と侮り居さ
りしに敵に新手の加りたる筒先最も鋭れば須
臾ばかりと戦ひ遂に堪へず敗走しく大野の
陣に逃入る筈賊兵は尚勝に乗じく追逼らんと為

たりし筈大鳥制しく長追ひせず軽く射方を引揚
く要所を選んで陣取りこの夜軍をひ殊に又
地の理に委しく移ぞりて而しく戦争の
趣き筈鷲の木村へ報知るゝぞ永井玄蕃頭筈
なりめ榎本以下の面々も既に上陸みしく居たるが
此注進を聞くやも斯の如くに官兵より我が情
実をも問糺さば砲撃その勢ひくは迚も使節
を送りたりとも願意の整ふべきにはゝ紛ば速に

兵を進めく有無の一戦に及ぶべしとて軍を松岡四郎左エ門古屋作左エ門等の面々に許多の兵を率ハせく大野口へと進まし別に土方歳三等に一手の兵を従ハしめく川汲峠の間道より七重村へと赴き せり余程に大鳥圭介ハ要害の地に色して敵の挙止を探り見るに既に大野の陣営ハ津藩の兵隊退きく福山大野の藩兵等ゲ入交りて大に護る其状最も厳重なるゆゑ大鳥猥りに攻蒐らゞ先づ



鷲の木に一左右を竢て事を成んと思へる折ゝ松岡古屋の両名ゲ精兵許多引俱して此手に来り加わり永井榎本等ゲ議する所迎も尋常の支ゑハ整ふべきの勢ひなゝ移ハ一挙に兵を進ませく函館を乗取れとの指揮あるに依て演るゝゆゑ大鳥ハまた一議に及ばゞ余ハ総勢大挙しく大野の陣屋を攻破り其機に乗じく五稜郭まで逼りて事を決せんと直に部署を定めて砲手を先に進ませく大野の陣所へ攻

脱兵進んで官軍の陣営を襲撃す

蒐まべ福山大野の藩士等も左右より備へくられを邀へ互ひに砲戰に及ぶ程にたじめは官軍兵備と調へ善く戰ふと見へたるが兵を遣ふに妙を得しと音に聞へし大鳥が機に臨み變に應じて先手に進み後陣に回り自ら八方に下知して衆を激まし戰へもれば官軍大いに乱れ立て死傷の者も多くして故遂に防ぐを得ず陣屋を棄て敗散せり去まに仍て脱兵等は忽ち陣營を奪ひ取り姑く這所に息を休めて五稜郭へと進みる態てまた土方歳三等が一隊は川汲峠の間道より出でて此道は最遠くして彼鷲の木より函館まで三十里に餘まるの殊に嶮岨の山なる故に大砲を率く支懸ちば僅に小銃搶劍など各得物を携へて七重村まで至りて折ふし此口を護り居たりし一手の官軍遮り止めて頻りに大砲を放ち撃たる勢ひ最も烈しければ賊兵あまに辟易して一歩も進む支を得ず稍逃足にありたる處にあら

手の隊長大岡甲次郎諏訪部信五郎の両名ハ此形状ヨ憤激シテ汚名ヲ雪ぐ方の挙動ヲ我ヨ続け
と言ふヨ疾く刀を揮て敵中へ飛び来る砲丸と
事ともせず真一文字ヨ斫く入り宛然夜叉の暴
たる如く當るヨ任せて雄立ちを為ヨ気を得し
脱兵等ハものくく競ふく砲を發し或ハ刀槍をうち
振て敵ヨ對ふく奮戦ヲ為ル敵も躬方も入乱れ
て互ひヨ勇を震ひ一ぐ手を負ふ者斃ふる中



ふも大岡甲次郎ハ敵中ヨ深入りして頻りヨ奮戦
ヨ及ひ一ぐ身ヨ数ケ所の重痍を被り今ハ斯
よと思ひ近寄る敵を砕りあびりく自ら刎れて
死まるるぞ諏訪部も劣らぬ働きて是も痛傷を受
ふぐ敵許多討取りて遂ヨ討死せし程ヨ此両雄
の勢ひヨ官兵甚ぐ辟易しく色めき立たる其處を
脱兵手痛く攻蒐れバ此手も支ゆる支を得ず噪と
崩れて逃出せ彼何処までもと追ふふる余程ヨ

大岡諏訪
部の両雄
七重邑ゑ
奮戰ま

清水谷侍従は既に五稜郭に在りて諸口に兵を分配し防禦の指揮に及ぶ雖ども脱兵の鋒先尖く屢敗軍の報あるに侍従は大いに苦慮せられ愚固より奥羽平定の後は這処等へ敵の襲ふを思ひ設けぬ支なる故守衛も甚だ手薄なるに脱兵不意に襲来せば勢ひ斯の如くなるべし迚も僅らの小勢にて嚙止んを懸ふ一先津軽の地に退き急に援兵を請ひて大挙して攻来らんに恢復せずと言ふ支なりと雖ども卒なく五稜郭を棄て函館に退き此頃当所に在留せる普魯士の蒸気船を借て津軽の青森に乗渡り尓ば諸口の官軍も咸脱兵に追立られ奇しく五稜郭に逃入りしに既に清水谷侍従に退去せられ跡なれば総軍いよいよ力を失ひ今ハ此地に姑くも止まるべきにあらずとて函館を先を争ひて函館に走り行き折から港に居合せし英國の船を頼みて是等も青森へ渡海せり斯ても知

らぬ脱兵ども五稜郭よ押寄せ来りて攻破らんと競ひかゝるよ敵兵更よ見へぎれば備ゑを防方の武威よ怕まく疾くも脱出去たるゆうんとおのく勇み歓びて輙く此郭を奪ひ取り凱音をゆん揚しとぞ這ハ是廿六日のゆうゆう余バまゝ榎本等ハ嚮よ陸軍の兵士等ハ本道及び間道より二手よゆゑ繰出させゝ敵の挙止の測らるゝわべ心元なん所やゆうん尚四天九蟠龍九の二艘よ海軍の兵士を乗らしめ鷲の木浦を発艦させゝ此日六日函館の港よ入りしゝよりや清水谷を始めとして諸藩士退去の跡ゆうく支ある者もゆうぐれバ兵士等直ちよ上陸ふし砲臺及び蔵庫を奪ひくあまよ日章の旗を揚たり然る処へ五稜郭より脱兵来り會せゝ是よりおのく持場を定め各所々を戍りしよ次の日廿七日秋田藩軍艦よて高尾九と歸まる船兵庫よ航海ゆうんとて今賊兵の函館よゆうぐしとハ知らぐしく入港よ及びし成脱兵夫

と見るよりを船将薩州藩田島慶蔵土州藩井上干城及び英人二名在りし紙鳶を上陸なしめく其船を奪ふと言へ徒て此月晦日よりの彼の鷲の木より残り脱兵回陽丸以下の五艘より打乗りその浦を出帆し次の日十月朔日函館へ入港せし祝砲廿一発を放ちく此地の所有とあるし紙賀しに假へ永井玄蕃をもして其の函館の奉行とかし居留の外國人へ告く共へ事務を裁断せんと約し又米銭を市在へ散らしく大

いへ人心を収めたり斯回りて後脱兵等ハ五稜郭へ會合しく相議して言へる曰既へ知府事等此地を去りて青森へ退くを支必ず藩々の兵を募りて再挙を計らん為なるべれど今より援兵続集もるとも事速へハ運ぶ難し是等の兵の向ハざる間へ松前藩紙鳶も角も所置なるを支急務なり然るへ此程五稜郭へ攻寄る時へ〻を松前の藩へして櫻井恕三郎とくる者我へ降参

倣しく渠に方畧を言含め宜しく藩主と遊説せしめ彼藩我に同盟せば躬方の幸ひなり上ら孫ど十ら七八ら我に抗せんとするも然る時ら速ら彼城を攻落し後ろを安くせんに乗じ左も右も試み渠を使節に遣ハし見んと欺て櫻井を呼出し和殿躬方に降伏して徳川家の為ら忠義を尽さんと思それなれ松前福山の城に至り我輩の誠意を説く宜しく躬方に勧められよ既ら我輩より藩主に贈らの呑簡あり持参ら通の書を渡せ恕三郎ハ辯舌よく直ちに福山に赴きて專ら脱徒の正義を唱へ且その兵威の鋭きを説き藩主を動く此黨に同盟なんと勧めく件の書簡を出せ一藩大に憤りて忽ち櫻井を捕縛し首を刎ち順逆を明らに意を示し急に兵士を糾合して賊を襲ふの進

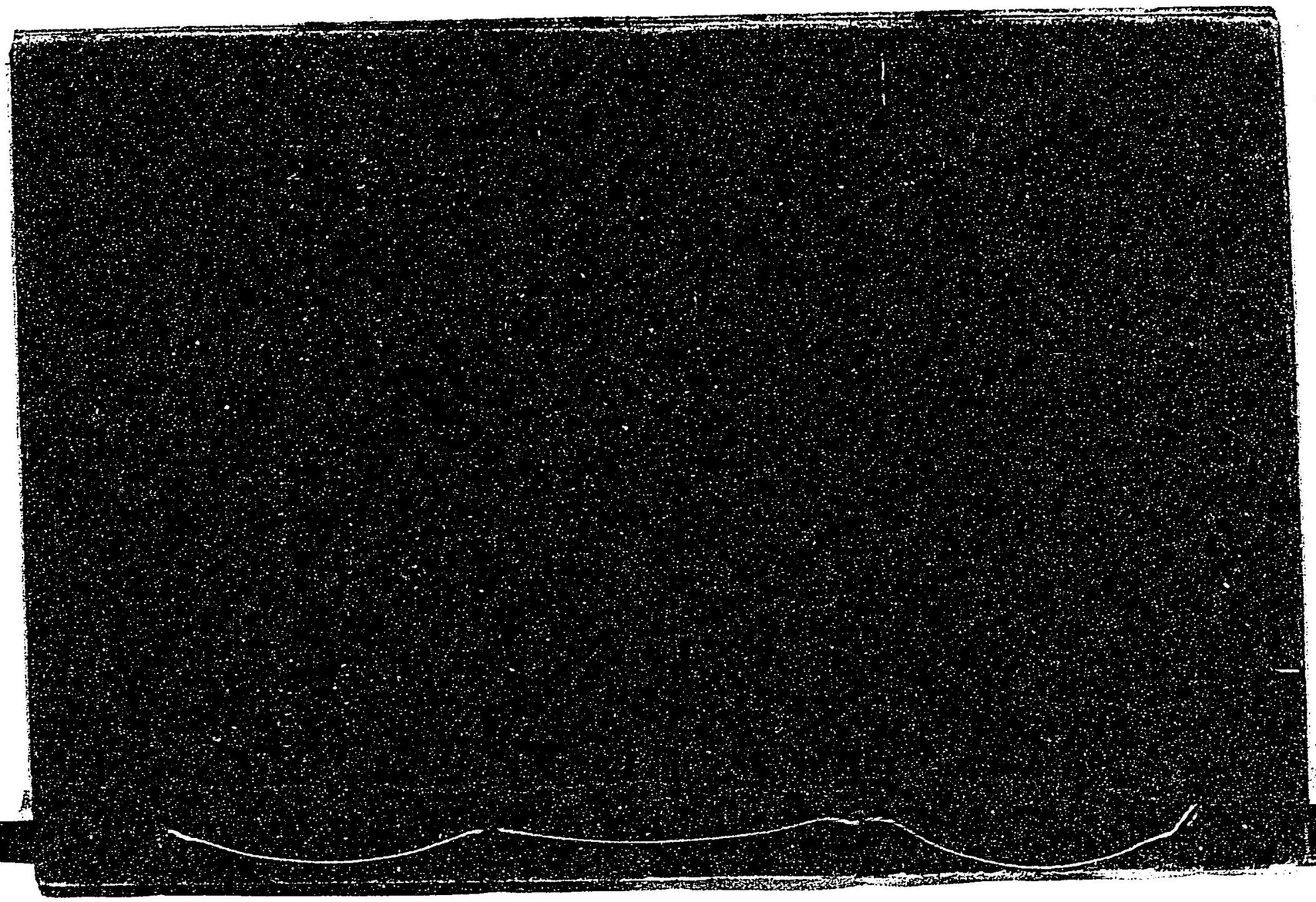
賊徒の為に遊説做んとして樺井本藩に捕へらる

備せり又脱兵の方にては怒三郎を使として福山へ遣はせしが渠が返事を安閑と手を空しく待つ時を機會を失ふ吏もいろ〳〵敵の挙動を探らんとて兵を境に出し置て彼藩我に同意せず倘抗戦する勢ひなるべ速に城下に逼りて勝負を一時に決せんとす賊将土方歳三は七百余りの兵を授て尻打村と言ふ所まで進めて陣を布かせ又同月蟠龍艦に海軍の兵を乗せて函館港を出帆させ

福山の湾中へ入り敵より砲を発し候へ海陸の兵と
もに矢庭に城を攻落さんと船中あのく片唾を呑で
陸地の挙止を窺ひ居
是より松前戦争の勝敗及び官軍大挙して蝦夷
地を回復するもの、訳ハ次の編に記すべし

明治太平記三編巻之二終


版權
免許

第六大區八小區
本所外手町十八番地
著者 村井靜馬

第壹大區六小區
日本橋通二丁目四番地
東京 書肆 小林鉄次郎藏板